

## 翻訳

ヘレーネ・シュテッカー著

## 「近代的女性の愛の手紙から」(1897)

掛川 典子

## 解題

本稿は、ヘレーネ・シュテッカー著『愛と女性』(Stöcker, Helene 1906, *Die Liebe und die Frauen*. J.C.C.Brun's Verlag, Minden) 所収の第4論文「近代的女性の愛の手紙から」(Aus dem Liebesbrief einer modernen Frau. Stöcker 1906: 30-37) の全訳である。初出は1897年であり、『文学のための雑誌』(*Magazin für Literatur*) に掲載された。若い女性が恋愛関係にあった男性との別離の後、その男性に宛てて書いた手紙の体裁をとっている。原文中で著者が強調している単語は、訳文中では太字で表記した。著者が“ ”を用いている文は「」を使用した。訳者が注意したい単語には原綴りを( )内に付した。他に第1論文と第6論文が同雑誌からの再録である。また1897年初出の他の2本は、『文学のための雑誌』から再録された第1論文「私たちの価値転換」(*Unsere Umwertung der Werte*) と『批判』(*Kritik*) から再録された第5論文「男性-運動」(*Die Männer-Bewegung*) である。この2論文とも掛川が既に訳出し解題も付しているので参照していただきたい。『愛と女性』の中にはシュテッカー(Stöcker Helene, 1869-1943) の初期のフェミニズム思想を知るために重要な論文が集められている。『愛と女性』の構成は次の通りである。

前書き (Vorwort)

序文 (Einleitung)

「私たちの価値転換」(*Unsere Umwertung der Werte* 1897)「近代的女性」(*Die moderne Frau* 1893)「女性思想」(*Frauengedanken* 1894)「近代的女性の愛の手紙から」(*Aus dem Liebesbrief einer modernen Frau* 1897)「男性-運動」(*Die Männer-Bewegung* 1897)「議会における女性ギムナジウム」(*Mädchengymnasium im Abgeordnetenhaus* 1898)「職業としての家政」(*Die Hauswirtschaft als Beruf* 1902)「ニーチェの女性嫌悪」(*Nietzsches Frauenfeindschaft* 1901)「新しい母」(*Die neue Mutter* 1902)

- 「母性と精神的労働」(Mutterschaft und geistige Arbeit 1902)
- 「女性的エロティック」(Weibliche Erotik 1903)
- 「女性運動と母性性」(Frauenbewegung und Mütterlichkeit 1903)
- 「男と女について」(Von Mann und Weib 1903)
- 「男性の解放に向けて」(Zur Emanzipation des Mannes 1904)
- 「売春と節制」(Prostitution und Enthaltbarkeit 1904)
- 「女性をうたう男性詩人」(Der Dichter der Frau 1904)
- 「女性会議の後で」(Nach dem Frauenkongreß 1904)
- 「未来の愛」(Die Liebe der Zukunft 1904)
- 「人格の愛」(Die Liebe der Persönlichkeit 1904)
- 「ブラウニング夫妻」(Die Brownings 1905)
- 「母性保護運動の目標」(Die Ziele der Mutterschutzbewegung 1905)

以上のように、シュテッカーがベルリンに出てきた翌年の1893年から、「母性保護同盟」(Bund für Mutterschutz)を設立した1905年までに、様々な雑誌に発表した論文が再録されている。興味深い題名が並んでいよう。

この「近代的女性の愛の手紙から」はなかでも短文で、私的な手紙の体裁をとっているため、あまり重要には見えないかも知れない。しかし当時圧倒的な諸制約のもと、女性でありながら男性と対等な一人の個人として、自己自身の道を探求し自立しようとするシュテッカーの決定的な決意表明がなされており、欠落させることはできない特異な文章なのである。しかも個人的な挫折した恋愛としてではなく、同時代の自立を目指す女性たちの一人として自己把握して発表した。自己探求を放棄しないために恋愛や結婚の挫折を経ても前進しようとする、多くの若く新しい「近代的」女性たちに向かって、またそういう女性を理解したい新しい男性たちへ呼びかけたものでもある。そして1905年に設立された1933年の亡命まで続けられた「母性保護同盟」を中核とする女性運動、性改革運動・産児調節運動、平和運動の全てを貫く、シュテッカーの思想と生涯を理解する鍵がここにある。シュテッカーは最初から男女両性を運動に巻き込んで活動した。女性運動の核は男性運動である、と男女の協働を主張していた。女性がまさに当事者である性改革運動・産児調節運動を掲げて、多くの男性知識人を巻き込み協力関係を結び、男女一緒に社会運動を展開する、という特有の運動形態を取った。男女が共に世界の悲惨を救済しようと志すならば、両性は「異なった道」でそれをするのか、というこの論文の中の問いは、実際のシュテッカーの生涯を貫く課題となったように思われる。

発表された1897年には実際の大恋愛の相手アレクサンダー・ティレ(Tille, Alexander 1866-1912)との出会いと別れがあった。ティレは牧師の息子で、ライプツィヒでドイツ語・英語学と哲学を学び、1890年に『ファウスト博士のドイツ民謡』(*Die deutschen Volkslieder von Doktor Faust*)で学位を取得した。1895年には『ダーウィンからニー

チェまで』(*Von Darwin bis Nietzsche*)を出版していた。ニーチェ(Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844-1900)の『ツァラトゥストラ』(*Zarathustra*)を初めて英訳し、最初の英語版ニーチェ全集の序文を書いた人物である。ニーチェ主義者であり、社会的進化論の信奉者であった。1899年デュッセルドルフで開催予定のゲーテ展の準備のために、1897年初頭にベルリンに来た。当時31歳、グラスゴー大学(スコットランド)のドイツ語とドイツ文学の講師であった。共通の関心を持つ二人は毎日会い、語らい、充実した稀にみる幸福な時間を過ごした。早春に出会いその年の秋にティレはグラスゴーの家族のもとに帰った。出会ったとき既に早婚主義者のティレには妻ロッテ(Lotte)と二人の子どもヴォルフラム(Wolfram)とエッダ(Edda)がいた。葛藤は続き、出会いから1902年の完全別離まで5年が費やされた。後に52歳のヘレーネは、この最初の大恋愛の体験、即ち恋愛・結婚・出産と自己発展・自立の葛藤問題を主題にして、1922年に唯一の小説『愛』(*Liebe*)を出版している。

シュテッカーの故郷は紡績産業の発達したエルバーフェルトである。工場経営者である父親は、若いときは牧師志望であって、熱心なカルヴァン派の信者として、厳格で禁欲的な家庭生活を営んだ。労働者の生活は身近にあり、エルバーフェルトでは社会主義労働運動家の裁判もあった。ヘレーネは19歳でベーベル(Bebel, August 1840-1913)の『女性と社会主義』(*Die Frau und der Sozialismus*)を読み、またニーチェ哲学によって教条主義的な教会のドグマから解放された。男児は育たず、四人姉妹である。長女であるヘレーネは、多産によって弱った母親に代わって家事と育児に従事し、妹たちの教育に当たった。これらの体験は、ヘレーネに主婦の仕事の大変さとともに重要性の自覚と誇りと自信をもたらした。早熟な文学的才能を示し、ゲーテ(Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832)の『ファウスト』(*Faust*)からはグレートヒェンの悲劇の原因として、ただ女であるのみで自分のものを何も持たない女性の悲惨さを読み取った。高等女学校卒業後ただちにベルリンでの勉学を熱望したが、妹が家事を担えるまで待たねばならなかった。1982年によくベルリンに出て、勉学のみでなく労働者演劇など大都会の文化を十分鑑賞しながら、女性運動のみならず人道主義的同性愛解放運動など様々な社会運動にも積極的に参加していった。現在の言葉で言えば、まさにダイバーシティの立場と言えよう。

20世紀初頭にドイツの大学は女性に正式に門戸を開いた。ヘレーネはこの時代に高等教育に参入した女性たちの最初の世代に属する。ベルリン大学が女性の正式な学籍登録を認めたのは1909年である。1892年にヘレーネはまず女教師になるための試験準備を開始し、1894年からはヘレーネ・ランゲ(Lange, Helene 1848-1930)が開設した女性のためのギムナジウムコースに通った。1895年にベルリン大学が女性の正式聴講を認めるとすぐに、ヘレーネは1896年からエーリッヒ・シュミット(Schmidt, Erich 1843-1913)、ヴィルヘルム・ディルタイ(Dilthey, Wilhelm 1833-1911)、ゲオルク・ジンメル(Simmel, Georg 1858-1918)らの講義を聴講しゼミナールにも参加した。ディルタイからはシュライエルマッハー(Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst 1768-1834)の書簡の整理を託さ

れたりしている。

さて自己発展を優先させる道を選んだヘレーネであるが、ティレの帰郷後は定期的に手紙を交換した。1898年にロッテが突然亡くなり、ティレは子どもたちのために母親代わりをヘレーネに要請した。ヘレーネは葛藤の末1898/99の冬学期のみグラスゴー大学に移り、学生寮に部屋を得て子どもたちを世話した。彼女はニーチェについて講演し、ゲーテ協会にも参加した。しかし貧困層に対するティレの不寛容と、女性観と信仰問題に関する信念の不一致が、ヘレーネに彼との別離を決心させる。彼女はベルリンに戻った後、バルン大学(スイス)のオスカー・ヴァルゼル(Walzel, Oskar 1864-1944)のもとで『18世紀の芸術観のために。ヴィンケルマンからヴァッケンローダーまで』(Zur Kunstanschauung des XVIII. Jahrhunderts. Von Winckelmann bis Wackenroder)によって1901年に学位を取得した。1902年出版の学位論文には、ティレの子どもたちへの献辞を記し、巻末の履歴書にはティレの名も挙げて学恩に感謝している。ティレは1899年にグラスゴー大学を退職し、1901年から1903年まで家族でベルリンに住んだ。ヘレーネは学位論文出版後子どもたちに懇願されて再会し、苦悩の末に決定的な別離を迎えた。ティレは商工会議所法律顧問等の仕事につき、1904年に軍人の娘と再婚後さらに4人の子を得た。1912年に心筋梗塞で死亡した。

ヘレーネは、1905年から「母性保護同盟」の活動のなかで、詩を書くユダヤ人弁護士ブルーノ・シュプリングァー(Springer, Bruno 1873-1931)と出会い、実質的な伴侶となった。「新しい倫理」の実践であるが、この共同生活は第一次世界大戦をはさみ破綻する。ヘレーネは人道主義(Humanität)の理念に基づき実践活動を貫いたが、ナチス台頭によってスイスに亡命を余儀なくされ、最終的にはアメリカ合衆国に渡って国際的な女性運動・平和運動の絆に支えられながら、癌のためニューヨークで亡くなった。

さて最後に「近代的女性の愛の手紙から」に戻ると、別離に直面してヘレーネはティレとの見解の相違を認識している。二人の道は異なっており、ヘレーネは自分の正しいと考える道を行こうと決めた。ティレとは「理念」や「目標」が異なっており、二人の見解の相違は性差に関わるものでもある、とヘレーネは受け止める。彼女の本当の願いは、二人で「同志」として同じ歩みをとることにすることであるから、ヘレーネは即座に関係を断ち切ろうとはしない。ティレの男性的見解に対して、彼女の女性的感覚を通してティレも学び、その「相互作用」の結果再び二人の道がひとつになる可能性を、ヘレーネは留保している。

ティレによれば、女性は結婚して妻、母となり家庭のなかで夫と子どもたちの世話のみをすべきで、稼がない女性には自由も権利もない。ティレの業績主義は、人を「有能」かどうか、経済力があるかどうかで判定する。「無能」で稼げない人間への蔑視はヘレーネを驚愕させた。業績主義に対し、彼女は精神的な次元の評価を対峙させる。精神的なものの評価、即ち特にキリスト教に関わる見解の相違は、ヘレーネには譲れないものであった。女性に関してヘレーネは、女性の「母性性」(Mütterlichkeit 精神的母性)と「母性」

あるいは「母親であること」(Mutterschaft 身体的母性)を分離させると同時に、身体的母性の評価も要求している。そしてティレに、既婚女性に就労を認めるか、主婦・妻・母親としての仕事を経済的・社会的業績として認めるかの二者択一を提起した。この選択は、前者は共稼ぎ夫婦の増加、既婚女性の就労継続、女性の管理職進出等として、後者は年金制度の変更等における主婦業の功績の経済的承認という、現代の日本でも我々に見える形で実現してきている。

ヘレーネの時代認識によれば、女性が「自身が建てた理念」に従って生きる時代が到来している。人間の最高の力は、「理性と芸術と学問」と捉えられており、それを女性も追求し享受できる時代である。女性は今や自分の人格を犠牲にする愛によってのみ生きるのではなく、「人生の課題」や仕事を引き受ける「道徳的力」を持つ。ヘレーネにとって人生の豊かさをなすものは、業績主義では切り捨てられる精神的に発達した人間の間の「同志的生活」の中に見いだされる。ヘレーネはこの理想を生涯をかけて追及した。男女の労働者のための社会改革運動という姿をした世界の救済のために、人生の豊かさを放棄することなく、女性の立場から男女の協働を実践して生きた。

#### 【参考文献】

- 掛川典子 2008 「ヘレーネ・シュテッカーの小説『愛』と「新しい倫理」」昭和女子大学女性文化研究所編『女性文化と文学』御茶の水書房 (155-179)
- 掛川典子 2017 「ヘレーネ・シュテッカー著『私たちの価値転換』(1897) 翻訳と解題」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』44号 (39-49)
- 掛川典子 2018 「ヘレーネ・シュテッカー著『男性－運動』(1897) 翻訳と解題」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』45号 (59-67)
- Stöcker, Helene 1906, *Die Liebe und die Frauen*. J.C.C.Brun's Verlag, Minden.
- Stöcker, Helene 1922, *Liebe. Rösl & Die*. Verlag, München.
- Stöcker, Helene 1943, *Lebenserinnerungen—Die unvollendete Autobiographie einer frauenbewegten Pazifistin*. 2015 Hrsg. Reinhold Lütgemeier-David und Kerstin Wolff, L'HOMME Archiv 5. Böhlau Verlag, Köln.
- Wickert, Christl 1991, *Helene Stöcker 1869-1943; Frauenrechtlerin, Sexualreformerin, und Pazifistin; Eine Biographie*. Verlag J.H.W. Dietz Nachf., Bonn.

## 訳 文

私たちの時代の過渡期には、自身の人格性 (Persönlichkeit) にまで発達した女性は、確かにこのような新しい女性の魅力に対する感受性があり、それ故に古い支配者—エゴイズムの中ではなく、このような自己責任を負える人格の要求を考慮することが既にできる男性と、極めてしばしば対面しています。このことがどれほど深くに及ぶ葛藤に通じねばならないかは明らかであり、私たちはそれ故に、多くの愛の幸福がそこで壊れるとしても、多くの結婚の幸福がここで挫折するとしても、驚くことはできません。苦い闘争なしには、血まみれの犠牲なしには、まさに何も得られないし、少なくとも共に生活することや二人の責任ある人格の創造であるような、より高い利得は得られません。そのような葛藤について添付の手紙も語っています。その手紙は、愛し合っている二人の人間の間の、深くに及ぶ根本的な敵対の記録として、私には注目に値するように見えるし、その温かさと決然さの中で同時に自ずと語りだすかも知れません。

——「そしてもし私たち二人が今や世界を救済する (die Welt erlösen) としたら——私たちは本当にそれを——異なった道です (auf verschiedenen Wegen tun) のだろうか?」とあなたは、あなたの親密な声の最も柔らかく最も内面的な響きをもって、別離の時に問いました。それに断固たる「然り」を答えることは簡単ではありませんでした。

そして今や、私たちがしばらく遠く離れていなければならないのは、私にはまるで好ましいのです——そうでなければこの別離も私たちには非常に困難になっていたかも知れません。危険なほど混乱させる個人的な現在によって惑わされずに、私たちの見解の間の溝も大き過ぎはしないのかどうか、それが幸福な共同の生活を可能にするかも知れないということよりも、私たちにとってより容易に明らかになるでしょう。というのは、あなたは確かに知っているのですから。私も、あなたと同様、私が正しいと認めた道を行かねばならないと。そう——もしもあなたがその道を一緒に行かないとしても! その場合でもまさに、私はあなたを愛しています——痛みと共に! ということなのです。

今や私たちの最後の会話の中でそれほど痛々しく苦く感じられるようになった、私たちの本質と私たちの見解の相違の全てに、私たちが最初の陶醉と歓喜の眩暈の内では何も気づいていなかったとしたら、——それはかつて全くもって私が、沈黙する至福の中で屈した「女」(Weib) に過ぎなかった、ということのせいでした。しかしその時それでも私たちは二人とも、私がそんな女であるだけではないと知っていました。そして私がさもないとあなたのそばで真剣に——同様に努力するあなたの同志として、同じ歩みをするあなたを知っていたから、なおさらあなたはこの謙虚さを享受したのです。私たちの発見 (Finden) の最初の喜びの中で私は勿論たいい静かに耳を傾けました。自分が相応の権利を認められるべきだとは私は考えませんでした——私は唯あなたの内でだけ生きていたのです。

しかし、私たちが一緒に行く準備をしている今、痛みをもって驚いたことには、私たち



の道は同一ではないことに、私たちは同じ目標を持ってはいないことに、私たちは気づきます。そしてそれでも私たちは同じ道を行きたい——単に休息の中で、愛らしい遊戯の中で、享受の中でのみならず、——とりわけ仕事の中でも。相互に助け合い促進し合う——どれほど素晴らしく私たちはそれを考えたことでしょうか！そして今や何ということ！あなたのために——あなたへの愛のために、私が自分のために正しいと認めた道を捨てるの？

私はあこがれてあなたの方を見ます。親密な共同体を放棄せねばならないことはそれほど辛いのです——それでも結局だめなのかどうか？私はあなたを愛しているのだから、あなたに単純に従ってはいけないのかどうか？

しかし、その場合どのように私は真剣に未来を見るのでしょうか、なぜなら私は、否、否、あなたの道は私の道ではない！と知っているのですから。それでもなお——私はもう一度あなたのいとしいエネルギーな手を離さないでいます——私はただちに英雄的に全ての糸を切ってしまうたくはありません。まあ見て。もし私が単に誇り高い謙虚さの中で従う一人の女であるだけでないならば——もし私があなたのように働き、努力するとしたら——その時はまた——相互作用が可能であるべきではないでしょうか？というのは、それが唯一私たちの困難で、痛みに満ちた葛藤にとっての解答なのかも知れないのですから。

私はこれまでほとんど受け取ってきただけ、あなたから受け取って来ただけというのは本当です。ああ、受けることは与えることよりも確かに非常に幸いです！しかしあなたは時がたてば——それが今日あなたの男性的な誇りにはとても大胆に見えようと——私から受け取ることもできるべきではないでしょうか？そして私たちの道は再び一つになるのでは？

私たちを別れさせようとするものは、確かにたいい男性としてのあなたと同様に女性としての私に密接に関わっている事柄なのです。

何という理解できない語りで、あなたは私を最後の時間に驚かしたことでしょう、——あなた、その語りの中で私は単に男性を愛するだけでなく、尊敬するよう学びました。そして「互いに対する畏敬」はそれでもまさに、私たちにとって良い結婚のために必要と見えたものでした。

さて一度に身体的な魅力のみが結婚に必要なのでしょうか？そして精神的な魅力もまたそれに加わることは、特別に幸運な場合に過ぎないのでしょうか？あなたにはこの幸運な場合が与えられていないことを、願うべきではないでしょうか、あなた悪い人ね？

「女、母はあなたにとって、新しい理想をめぐる闘争において重要な手段なのですか？」一つの手段?! そして目的は——男性?! それをあなたが言うのですか？あなたが?! そしてそれが、私たちをはるかにキリスト教の背後に引き戻す、進歩した世界観であるべきなのですか——力強い男性たちを生み出すためにのみ女性が必要である諸民族へと？

そして、最高の意味における「母性性 (Mütterlichkeit)」は身体的な母性 (Mutterschaft) に必然的にいつも結び付いているということ、あなたも信じてはいません——結び付い

ているのだとしたらその場合には、それほど沢山の「非母性的な」身体的な母親たちはいないでしょうから!

勿論、「私たちの子どもたちの国」を私たちは探したい——そして、自身の子どもたちを諦めねばならないことは、あらゆる健康な人間にとって苦痛になるでしょう。しかしそれは必然的に肉体的な子どもだけであらねばならないのですか? プラトンとキリストとニーチェは、私たちが彼らの肉体的な子どもたちについて何も知らないのだから、無益に生きたというのでしょうか?! あなた、親愛なるお馬鹿さん、あなたはそんなことを真面目に考えることはできません。

「女性は、自分の夫にとって多くのものである、ということのみを考えるべきなのですか?」私はあなたがそれを言うのを本当に聞いたのでしょうか? 全ての活動をあなたの理念へ奉仕させ、そしてなお夫で父親であることのみを、私が今度はあなたに求めたとしたら? そして完全に発達した女性にとって、この無理な期待は余り辛くないし憤慨させないだろうと、あなたはまだ本当に信じているのですか? そうならば私にあなたに対し言わせて下さい、それは古く残酷な迷信であると。

私を信じてね、私だけでなくあらゆる成熟した女性が、自分が建てた理念へ奉仕する時代が来たのです。その女性に人生が、自分の人格性を犠牲にする愛と、人生の課題や仕事との間に最も困難な選択を迫ります、——その時代に女性は仕事を自分に引き受ける道徳的な力を見出すのです。あなた自身が確かにしばしばそれを言いました。「人は愛なしに生きられる(即ち一人の個別人間の所有なしに生きられる——だからといって人が愛なしにいる必要はない)、しかし人生の課題なしには人は生きられない」と。あなたは正しい、しかしあなたは、女性をまたこの「人」の中に含み込むことを忘れています。私たち二人が、男と女の間今日なお横たわる淵をしばしば嘆くとしたら——私はその淵に橋を架けることにいつでも**活動的に**協力してはいけなないのでしょうか?

「どの人間、どの性、どの地位の人も稼ぎに合わせ自由と権力を持つ」と、あなたは言います。確かに——それ故今私たちは、自由で偉大な人生には必要に見えるものを受け取ります。すなわち理性と芸術と学問を——それらは人間の最高の力です。最も好ましいのは全てをあなたと共に——しかし——もしそうであらねばならないなら、私には非常に困難になるでしょうが、それでも——あなたなしに!! あたかも私があなたから好んで学んだり、受け取ったりしたくはないかのようにではありません! あなたが男としてより良く知っており、私があなたから受け取ることができるとあなたが理解していた、非常にたくさんの事物の中で、それが私をどれほど幸福にしたかをあなたは余りにもよく知っています。しかし私があなたの際立って男性的な感覚に、それでも非常に強烈に女性的に見える時、まず第一に女性としての私に関わる事物において私の女性的な感覚を信頼し、そして——私から学び受け取ることがあなたはできないのでしょうか?

しかしあなたの素晴らしい、幸福にする自然科学に関わるものは、数千年来人類が精神的に要求してきたものを全てスクラップにします、——キリスト教が初めて人間に「魂」



を与えたことにニーチェも賛成していることを、あなたは忘れているのですか？あなたの自然科学は「有能な」と「有能でない」の区別を知っているだけなのですか？おお確かに、生存競争の日常のためにはそれでも充分です——しかし高い精神的な財産をめぐる、高い魂の地位をめぐる闘争に際しては——そこでは人は人間をどのように価値付けるのですか？「道徳の古い板は破壊されました」。しかし新しい板はようやく半ば書かれました。しかもまだまさに不十分に書かれているのです。私たちは最後に新しい板の上にもなお多くのものを、例えばキリストが教えたものを活用できるべきではないでしょうか？

「女性が結婚の中で経済的に男性と同じような業績をあげられない限りは、その間中彼女はより大きな社会的かつ政治的な権利を得られないのですか？」ごめんなさい、堂々巡りしているこの男性論理 (Manneslogik) が、私の女性悟性 (Frauerverstand) には全く明解というわけではなくて。だからあなたはまず稼ぐことを女性に禁じます。女性は家で夫と子どもたちの世話のみをしなければならぬ。そして彼女があなたに要求されることをするので、あなたは言います。分かったかい、彼女は稼がない——従って彼女はより大きな権利は得られないのだ！

そして女性の母性を——彼女の配慮と苦労の全てと共に——それはあなたにはいつもは女性にあって主として価値あるものですが——それをあなたは突然無と見なすのですか？それは社会的な業績ではないのですか？生命の危険を冒して新しい人間に生命を与える彼女が、「敵」を殺す男性よりも、民族の福祉のためにより多く貢献してはいないというのですか？それではどちらの側に、より積極的な業績があるのでしょうか？

そこにはただ二つの道があるだけです。あなたは女性に結婚の中でも自立的で経済的な実存の可能性を与えねばならないか——あるいはあなたは主婦、配偶者そして母親としての彼女の業績を、経済的に社会的な業績として考慮に入れねばなりません。第三の道はないのです。

そしてたとえ男性が現実に、努力して得た発達に際して、絶対的な権力という点でいかにほどかを失わねばならないとしても——彼は自分が失ったよりも非常に多くを得るのではないのでしょうか？根本において現存在の豊かさをなすものは、より深い、より高い、精神的により発達した生活の同志ではないのですか？ごめんなさい、最愛の人よ、愛の手紙がほとんど論文になってしまったなら。しかし私たちが一緒にいた最後の週にそれが私を非常に悩ませたので、私たちは今解明せねばならないと私は感じたのです。根本において私は、どのようにあなたがこの古くひどい語り方に至ったのか、全く理解していません。あなたは私を少しからかいたいのですか？私を全く馬鹿らしい事物でからかうことをどれほどあなたはしばしば好んだかを、そして、それがどれほど私があなたを愛していたかあなたに示したから、私が驚くとどれほどあなたが喜ぶかを、分かっていますか？恐らくこの度もそうだったのでしょう。小さな残酷な喜びを得るために、私があなたと一つではなかったという私の痛みを知るために、あなたは私を試そうとしました。恐らく、私があなたの愛する顔の中に、あなたの輝く眼の中に、何故あなたが私を苦しめるのかを読み取る

「近代的女性の愛の手紙から」(1897)

ことを、あなたは長いこといらいと待っていたのです。

そうして今あなたの番が来ました。——私は今、あなたが別離の時にあなたの愛の全てと私の魂に及ぼす権力への意志とをその中に込めた、困難な運命的問いに答えることをあなたの手に委ねます。「もし私たち二人が今や世界を救済するとしたら、私たちは本当にそれを異なった道にするのだろうか?」——

(かけがわ のりこ 生活機構研究科生活文化研究専攻特任教授)